

### 03 川崎公平・第一の黙想の感想

バンコク日本語キリスト教会牧師 中岡和彦  
牧師：6年 説教塾：4年 セミナー参加・5回

#### 川崎公平師による第一の黙想についての感想

(川崎公平第一の黙想(資料03)の引用を行数と下線で示し、次に感想を記す)

① 11行 私たちも、ここに自分の名を入れることができる。

聞き手をテキストの中へと招く、優れた言葉であると思います。テキストを、そして聖書全体を“自分の物語”として読むようにと導く牧会者の配慮が感じられます。また、このテキストの一つのテーマが“招き”ですが、この言葉が説教の導入部分の中で“招き”としての機能を果たしています。

② 22行 主イエスははっきりと、マタイを裁いておられる。

③ 24行 考えてみると、容赦ない裁きの言葉である。横で聞いていたマタイも、ああ、今自分は裁かれていると気づいたと思う。

この主イエスの言葉を、“裁きの言葉”としてマタイは聞いたとする説教者の言葉は、私にはとても新鮮でした。テキストを深く味わう黙想の中から生まれた言葉ではないでしょうか。しかも、マタイはこの裁きの言葉を、“感謝しながら聴き取ったと思う”と説教者は続けます。これもまた、深い黙想から生まれた洞察だと思います。しかし黙想の発表後に、“裁き”という言葉が強すぎるという意見が多数あり、議論となりました。

④ 29行 われわれもまた、今この言葉によって裁かれているのではないか。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではない」。こんな厳しい裁きの言葉はない。

13節b“わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。”を読む時、後述のルターの指摘通り、私を含む多くの人が“罪人を招くためである”に自分を重ね合わせ、“正しい人を招くためではなく”を読み飛ばしています。説教者はあえてこの部分に注目し、“こんな厳しい裁きの言葉はない”という黙想の言葉にたどり着きます。ここで、私はこのテキストの持つ厳しさに気付かされ、自分の説教の構成を考え直しました。

⑤ 32行 案外われわれは、「わたしが来たのは、罪人を招くためだ」という主イエスの言葉を聞くとき、そうです、わたしこそその罪人です、と喜んで手を上げるのではないか。

イーヴァントの黙想の中で、ルターの言葉“この福音書の言葉を聴いたすべての者が錯覚して、直ちに思い込むことは、自分がどこに属しているかということについてである。つまり、自分は病める者であり、罪人であり、徴税人であると思い込むのである。”が紹介されています。説教者はこのルターの言葉を、“喜んで手を上げる”と躍動感のある表現で言いかえています。

⑥ 36行 そのようなわれわれが、自分で謙遜して「私のような罪深い者が」などと言うことはあっても、他人から自分の罪を指摘されると、自分でも不思議なくらい反発するのではないか。あるいはまた、他人が罪を犯すとき、特にその他人の罪が、直接自分に被害をもたらすとき、たちまちわれわれもまたファリサイ派になるのではないか。

聴き手が自分の罪を認識し、“我々もファリサイ派”であることを自覚することのできる優れた言葉だと思います。

⑦ 47行 考えてみると、われわれが人の罪を指摘するとき、その指摘のしかたは、癒しの力をひとつも持たないことが多いのではないか。

このあと、三浦綾子の小説の中の一節を引用し、“傷口に塩を塗るようなしかたで他人の非を責める誘惑”が我々のだれにでもあること、我々もまた癒すことのできないファリサイ派であるというみじめさを、深く自覚させる言葉となっています。

⑧ 57行 主イエスはファリサイ派に、「だからお前たちはどっか行ってしまえ」と言われたのではない。「行って、学べ。神の求める憐れみを」と言われたのだ。あなたがたも自分の病に気づいてほしい。わたしの招きを受けてほしい。

我々もまたファリサイ派であるというみじめさを自覚した聴き手に、主イエスはその我々を拒絶するのではなく、憐れみを学ぶよう招いておられることを語ります。招きで始まった黙想が、“わたしの招きを受けてほしい”と我々を呼ぶ、主の招きで閉じられます。